
270分?

駈牙 連

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

270分？

【Nコード】

N1519BA

【作者名】

駆牙 連

【あらすじ】

オペ室看護師の成海大和ナルウミヤマトは同僚看護師の進藤雅樹シンドウマサキとようやく恋人同士となった。付き合ってから初めてのイベント『誕生日』に奮闘するナル。ちゃんと祝うことが出来るのか。『270分』の続編です。先にそちらを読まれる事をオススメします。

俺は今、悩んでいる。

「マサ、来週末何してんの？」

「来週？今週じゃなくて？ナルが先の予定聞いてくるなんて珍しいな」

他意はなく、純粹に問い返してくる。その日がマサ自身の誕生日だという事も忘れて。

6月15日、日曜日。俺らは揃って休日。そして、25年

前にマサが生まれた日。

こういう時に、先に生まれた方は得だと思う。初めてでは祝い方の加減が掴めない。何かしてあげたい、喜んでもらいたい気持ちには山ほどあるんだけど・・・。何せ今まで付き合ってきた女の子にさえ、自分からちゃんと祝ったことがないかもしれない。だから本当に、わからないんだ。

「その日、ちよつと付き合っただけから、空けといて」

「え、いいけど。何、前言ってたバツシユ買っただけ？」

マサが部屋に飾っているバスケの大会で優勝した時の集合写真を見ながら聞いてきた。マサの部屋にもあるヤツだ。お互いカメラは持って無いけど、部活で写真はよく貰う。

「あー・・・まあ、そんな感じ」

テキトーに言葉を濁した。実際、男同士なんて普通は誕生日なんて祝わないもんだろ。俺らだって今まででも大して祝ったことはない。俺自身は祝いたくなかったわけじゃないけど。

第一、まだ何も決められていないから、言いたくても話せないわけ。とりあえず、何か考えるなら今週末しかない。

「ナル、今週末は？」

あ・・・。

「悪い、今週はちょっと・・・」

不自然に言葉を濁してしまったか？でもしょうがない。来週にはマサにちゃんと説明しよう。

お前の誕生日の準備をしてたんだって。

「何買えばいいんだよ・・・」

6月8日、日曜日。俺は朝から街を歩き回っている。百貨店やらスポーツ用品店やらCDショップやら。女の子相手なら、アクセサリーとか鞆とか少しは想像つくんだけど。6月つてのも厄介だ。クリスマスは手袋、みたいな季節モンが無い。強いて言えば雨傘か。マサは何が欲しいんだ？

「いらつしやいませー！何かお探しですか？」

「あ、いや・・・」

店員さんにも何言ったらいいんだ。恋人は男で、初めての誕生日プレゼント？言えるワケねー！・・・本人に聞いた方がいいのかな。いや、それじゃ意味ないだろ。

自問自答しながら、結局この店でも決めかねた。

バスケット用品・・・実用的過ぎるか。欲しがってたスゲーチャリ・・・そんな高いモン貰っても困るだろ。俺んちの合鍵・・・俺んち遠いからマサはあんまり来れねえしな。あー・・・もう！どうしたらいいんだ。

悩む頭を抱えて一休みのために入ったコーヒーショップ。そういえば前にマサの元カノと入ってマサに見られたのも、この店だ。そこで見てはいけないものを、見た。

「あ・・・？」

その二人は店の奥の目立たない席に座っていて、最初は気づかなかった。しかし、間違いない。

「マサと、元カノ・・・」

元カノの杏奈。何で二人で？そして俺の記憶が確かならば、マサの誕生日の1週間前は。

マサの元カノの、誕生日。

「今日、何で元カノと会ってたんだよ」

「え・・・」

タイミングが良いのか悪いのか、その夜は珍しくマサから電話がかかってきたのだ。そんな電話の開口一番に、俺はそんな言葉を発してしまった。

「ああやって内緒で会ってんの？」

「違うよ。アレは・・・」

「何だよ、俺には言えない事かよ」

「杏奈が、太田にフラれたんだと。ていうか他にも何人か彼女がいたらしい。それで、話を聞いて欲しいからウチに来ていいかって言われて、それは困るから外にしてって言って・・・。あんまりベラベラ言う事じゃないと思って・・・」

「気まずそうに口籠るマサにイライラする。」

「それであの子の誕生日を祝ってやったって？それに深い意味はないってんなら、ただだけお人好しなんだよ！」

「え、誕生日？・・・あ・・・」

少しは冷静になれと忠告する自分自身を無視して、怒鳴りつけてしまった。

「誕生日とか忘れてたよ。・・・じゃあナルはあの店で何してたんだよ」

「え？」

「予想外の切り返しに言葉が詰まる。」

「今日は会えないって言ってただろ。それなのに」

「それは・・・」

マサの誕生日プレゼントを探していた事は内緒にしたかった。それに今日は結局怒って帰ってしまったからプレゼント自体も買っていない。何と言いつついいか考えていると、電話口からは予想

外の言葉が聞こえてきた。

「眼科の山下先生か？」

「え？ユカリ先生？何で」

「何で下の名前で呼んでんだよ！・・・もういい、切る」

「ちょ・・・マサ！」

引き留める言葉も虚しく、怒っていた筈の俺が虚しく電話を切られてしまった。

「何でそんな話が出てくんの？！なんなんだよ、もー・・・」

マサから掛かってきた電話だったのに、結局用件もわからないまままだ。

「ユカリ先生つてのも、『山下』が多いだけだろ・・・」

重い溜息が漏れた。

少し気分を落ち着かせるために、やかんを火にかける。

「・・・ダメだよなあ。アイツが浮気する筈ねえってわかってんのに。ただの嫉妬、だよな」

インスタントコーヒーを入れたマグカップにお湯を注ぐ。

元カノと会っていた事がムカつく事には変わりは無いが、そこはきつとマサの優しさからだろう。そこまでマサの事がわからない訳ではない。

そして最近のマサの不機嫌。その理由もわかってる。山下ユカリの俺への熱烈アプローチだ。TPOをわきまえないからタチが悪い。嫌でもマサの視界に入る。そして相手が医者というのもあり、上手くかわせない俺も悪い。

「明日、謝るか」

その夜のコーヒーは、これからはちっさい嫉妬でイライラしない様にと牛乳多めでカルシウムを取る事にした。

翌日月曜日、退勤の入力の為にパソコンに向かうマサを見つけた。

運よく周囲には人はいない。今しかない、謝ろう。

「なあ、マサ……」

「大和くんっ！」

嫌な予感がした。俺の声に被さって来た俺を呼ぶ声は。間違いない。眼科の……。

「ユカリ先生……」

「ただだけタイミング悪いんだよ、俺は！」

「大和くん、今日はもう上がり？ちよつと今夜付き合って欲しいんだけどお」

勿論マサも振り返る。

顔、こえーよ。

マサと付き合ってから気付いた事が幾つかある。

まず、恋愛に淡泊だと思っていた己の嫉妬深さ。それから、独りが好きだと思っていた自分自身の寂しいと感じる心。あと、誰かとの未来を願う気持ち。

その全てに戸惑うけれど、それも決して悪くないと思う。そして、それはちゃんと自分で守らなきゃいけない。

「大和くんっ！今日この後、買い物とディナーに行きたいのようだからちようどいい。マサの目の前でハッキリと断ろう。」

「あの、ユカリ先生！俺・・・」

「あつ、進藤くんもよかったらどうかしら」

遮られるなよ、俺っ！しかもマサに話を振られてどうすんだ。

「俺、今日は用事あるんでスイマセン」

そう言つとマサはさつさとロッカールームに引つ込んでしまった。・・・何だよ用事つて！元カノとか言ったらキレるからな。

「そうなの、さんねーん。ねえ、大和くんは？」

「あ、いや・・・」

今日は、まだ買えていないマサの誕生日プレゼントも探さなきゃなんない。ここはちゃんと断つて・・・。

「今日は」

「じゃあ、今週はいつなら大丈夫？」

うつ・・・そう来るか。察してくれよ。

「ナルくん！ちよつとこつち手伝ってくれない？！」

助かった。絶妙のタイミングで呼んでくれたのは、看護師の上司の長谷さんだ。

「はっ、ハイ！ユカリ先生すみません」

白々しいかもしれないが、頭を下げて話を切り上げ長谷さんの方へと走った。

「ナルくん、もっと上手いかわし方を学んだ方がいいわよ」

困ってたのがバレてたのか・・・。

「・・・ハイ」

「そうしないと、本当に大事な人に誤解されるわよ」

「もつともです」

とは言っても、色々としがらみもあるから難しいのだ。

結局この日も町を歩き回ったが、誕生日プレゼントは買えなかった。

家に帰り着き、頭を抱えた。誕生日が何も決まらない。日にちも無い。

「しょうがない。・・・アイツに相談してみるか」

あまり電話をかけた事が無いため、リダイヤルには残ってない。電話帳から探した名前は『成海美弥』。

「もしもし」

『あつ、お兄ちゃん！久し振りだね、どうしたの？』

相変わらず元気な声で応答したのは、妹の美弥。

「あつ・・・ちよつと相談なんだけど」

何となく口ごもってしまう。

『珍しいね。どしたの？』

「お前、彼氏いたよな。誕生日ってどんな事してんの？」

男の誕生日の祝い方なんて女に聞くのが一番だ。

『あつ、彼女の誕生日なの？そうだなあ・・・プレゼントならやっぱりアクセサリーが喜ぶんじゃない？指輪が重かったらネックレスとか』

うーん・・・男にあげる物を相談したい、とはいい出せねえ。

『あつ、私が誕生日にサプライズで彼氏にしてもらって感動した事あるんだけど』

「え、なに？」

そうそう、そうというのが知りたいんだって。

『手作りの誕生日ケーキなの』

「はあっ？！んなモン作れるかよ」

自炊はたまにするけど、甘い物なんて勿論作った事ない。

『普段しない事をするからいいんだって！簡単な作り方教えてあげる。彼女は何ケーキが好きなの？』

マサは普段あまり甘いものを食べない。けど、数少ない好きなケーキは知ってる。

「チーズケーキ」

『オッケー、任せて。ちゃんとメモしてよ？』

マジかよ・・・。そのまま押し切られてレシピを書き留めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1519ba/>

270分？

2012年1月5日21時52分発行